ドキュメントレポート

《美唄市小学校「農業科」スタートまでの10ヶ月》

「農業を学ぶ」から「農業で学ぶ」へ
小学校における「農業科」教育の道を拓く挑戦
（次なる“百年の計”への道）

一般財団法人HAL財団

Photo by KATOMI

農業科は子どもたちの
生きる力を引き出します。
日本中の小学校に農業科ができたら、
日本はすばらしい国になるでしょう。
JT生命誌研究館名誉館長　中村桂子

磯　田　憲　一・著
（一般財団法人HAL財団理事長）

目　次

はじめに ―――――――――――――――――――――――――――――― 4

「農業科」の先駆者・福島県喜多方市に学ぶ ―――――――――――― 7

アルテピアッツァ美唄30年・次なるステップへ向けて
「中村桂子講演会」を企画へ ―――――――――――――――――― 9

「希望の“君の椅子”」を通して中村桂子さんに出会う ――――――― 11

HAL財団　中村桂子さんと美唄市を結ぶ役割を果たすことに…― 13

日本で唯一、小学校「農業科」を実践する喜多方市を訪問 ――― 15

美唄市、北海道で初めて「農業科」をカリキュラムに… ――――― 17

中村桂子さんのメッセージを第一章に掲載した
『農業科読本』がついに完成 ―――――――――――――――――― 19

美唄市長・教育長記者会見(2023年5月16日)、
小学校「農業科」が正式にスタート ――――――――――――――― 21

“農業で学ぶ教育”の輪をつなぐサポートチームを結成、
「農業科」を北海道スタンダードに ――――――――――――――― 24

はじめに

国土の22％を占める広大な大地に多彩な農業が展開され、日本の食糧基地としての役割を担う北海道。その北海道にとって、将来においても農業が名実ともに「基幹産業」であり続けるためには、産出高の大きさを拠り所とするだけでなく、農業・農村の担う役割や秘めている価値に対する北海道に暮らす人々の共感と敬愛の輪を育み、農業・農村の営みを支える“すそ野”を広げていくことが大切です。そのことが、産業としての力量はもとより、豊かな暮らしを支える基軸としての総合力を高めていくことにつながると言えるでしょう。

農業が内にもつ“生命産業”としての意味を踏まえた時、私たちがこの北海道に育ち暮らす上での原点として、農業が育む多様な生命の営みに学ぶ機会を、この北の大地に広げていくことが、人と暮らしの在りようを考える上では勿論、地球規模で広がっている今日的課題に向き合うためにも大きな意味を持つと考えます。「農業」が秘める深くて大きな使命の一つでもあると言っていいでしょう。

その意味で、“北海道の未来”そのものである「子どもたち」に、広く“農業で学ぶ”場を用意することは、子どもたちの「生きる力」を育むことは勿論のこと、多様な生命に対する敬愛の思いや「生きもの」の一つとしての謙虚さを内なるものとしていくための、次代を見据えた大切な方向性といえます。

そうした視点に立つ時、農業を基幹産業と標榜している北海道にとって、現在、美唄市、美唄市教育委員会が2023年度スタートを目ざして準備を進めている小学校教育に「農業科」を組み入れる挑戦は、前例のない先駆的取り組みであり、画期的な仕組みと言えるものです。

私たちHAL財団は、農業・農村が秘める価値への共感や敬愛の輪を広げていくことが「持続可能な農業」を支え、ひいては、この大地を世界に稀なる“暮らしの王国”へと導くことになるとの視点に立ち、2022年4月、次なるステップに向けて新たなスタートを切りました。今、美唄市、美唄市教育委員会が、多くの障壁を乗り越え他に先駆

けて取り組んでいる、小学校での“農業で学ぶ教育”を支援することは、私たちが目ざす方向性に合致するものであり、HAL財団のスリムさと自律性を活かし、その輪を各地域につないでいく役割を果たしていきたいと考えています。

北海道には先例なく、全国的にも僅か一例しかない、この新基軸の取り組みが実現するまでの経過を、取り組みを支援するHAL財団の思いも含めて、数回に分けて報告することとします。

一般財団法人　HAL財団
理事長　磯田憲一

「農業科」の先駆者・福島県喜多方市に学ぶ

現在の教育の場における子どもたちと農業との向き合い方をみると、北海道はもとより、全国的にも小学校では「農業体験」という形で広く、一般的に行われています。しかし、農業体験はあくまで“体験”の域にとどまるものです。成長期の基礎的な学びの重要性を踏まえると、「農業で学ぶ」取り組みを日常的な学習プログラムの中に組み込むことは、計り知れないほどの大きな意味を持っていると言えるでしょう。

現在、小学校の時間割の中に「農業科」を組み入れ、授業の中に位置付けている自治体は、2006年（平成18年）、内閣府から構造改革特区（教育特区）の認定を受けて「農業科」をスタートさせた福島県喜多方市のみです。構造改革特区認定は、その後全国展開に向けた対応のため、2008年（平成20年）に廃止され、喜多方市の「農業科」は、2009年（平成21年）から「総合的な学習の時間」の中で実施されています。

北海道美唄市は、その喜多方市の取り組みに学び、喜多方市教育委員会から指導主事を招くなどの学習を重ね、2010年（平成22年）に『美唄市農業体験副読本』を制作。2011年（平成23年）から「グリーンルネッサンス推進事業」として小学校における「農業体験学習」を実施してきました。

農業体験学習は、北海道でも広く一般的に行われていますが、農業体験の副読本を制作したのは、北海道の自治体としては美唄市が唯一であり、日本全体としても、農業に関わる副読本を持っている自治体は、喜多方市と美唄市のみと思われます。

美唄市は、北海道の中西部に位置し、かつて日本の石炭産業を支えた炭鉱都市の一つです。その炭住街にあった市立小学校の跡地に、

1992年（平成4年）、美唄市が開設したのが芸術文化交流施設「アルテピアッツァ美唄」。「アルテ」は、地域の歴史や風土と彫刻が混じり合った公共空間ですが、開設から30年を迎えた2022年、管理運営を担っている認定NPO法人アルテピアッツァびばいは、美唄市との共同主催で、この唯一無二の美しい佇まいを持つ公共空間を美唄のアイデンティティ発信の場として活用していくことを目ざし、思い新たに「次なるステップへ」向かうための“キックオフセミナー”を企画しました。

そのセミナーの記念講演をお願いしたのは、JT生命誌研究館（大阪府高槻市）名誉館長の中村桂子さんです。長く生命科学の世界を探求してきた中村桂子さんを「アルテピアッツァ美唄」のアートスペースにお迎えし、2022年8月、『生きものとしての人間のつながり』と題した講演会を開催しました。

後日、不思議な縁の繋がりを実感することになるのですが、この講演企画でお招きした中村桂子さんとの出会いが、農業をめぐる新たな物語の扉を開くことになったのです。

アルテピアッツァ美唄30年・次なるステップへ向けて「中村桂子講演会」を企画へ

中村桂子さんの記念講演の開催が、思いもかけない新たな道を切り拓くことになるのですが、その道のりの経過を報告する前に、「アルテピアッツァ美唄」30年を機に、思い新たに「次なるステップへ」向かう“キックオフセミナー”をなぜ開催することになったのかについて、少々敷衍(ふえん)しておきたいと思います。

「アルテピアッツァ美唄」は、旧美唄市立栄小学校の閉校跡を活用して1992年に創設されました。その創設前から閉校跡には「美唄市立栄幼稚園」が開設されていて、「アルテ」がスタートした後は、芸術空間全体を園庭とする幼稚園として、多くの訪問者がその存在に驚き、類例のない幼稚園として憧憬される存在でした。しかし、残念ながら2020年3月、65年に及ぶ歴史に幕を下ろすことになりました。

「閉園」を決めた当時の市長や市議会が、どのような政策的意図でそう判断したのかは定かではありませんが、もしかすると、栄幼稚園の存在は、たまたま芸術空間の一角に開設されている一幼稚園、という認識にとどまっていたのかもしれません。そうだとしたら、栄幼稚園と園児たちの存在が、この空間全体にかけがえのない価値を付加してきたことを見逃していたということになります。

「灯台下暗し」は、誰もが陥りがちなことですが、地域の「本物の力」は、「ローカル」を見つめ、「ローカル」を深く掘ることで生まれてくるものです。この「アルテピアッツァ美唄」は、全国にある芸術施設の一つというだけでなく、繁栄と衰退の歴史を染み込ませてきた土地の記憶、時代に翻弄された人々の歓びや哀しみの集積、そして「アルテ」を居場所とする子どもたちの日常の風景としての存在…、それらがさまざまに織りなし相まって“場の力”を生み出し、多くの人たちの心に確かな位置を占めてきたのです。その「場の力」を生み出す上で比類なき役割を担ってきた子どもたちの「居場所」を失ったままでいいのか…。それが、「アルテ」の「次なる30年」を見据えた時の強い課題意識でした。

そうした中で、美唄市は、幼稚園閉園後のこの場の利活用を考える検討委員会（委員長・羽深久夫札幌市立大学名誉教授）を、2020年9月に設置しました。検討委員会は、その後一年半に及ぶ検討を経て2022年3月、美唄市長に「提言書」を提出しました。その柱は、閉園後の空間を利活用し、再びこの場に「多様な幼児教育“機能”」を再生していくことが、市民の誇りを高めていく確かな道のりであるという確信に満ちた提言でした。

その趣旨を受け止め、「アルテピアッツァ美唄」を管理運営する「認定NPO法人アルテピアッツァびばい」は、次なる30年を見据え、この空間を「居場所」とする子どもたちの歓声が、アルテの丘にこだまする風景をもう一度取り戻していきたいと考えています。そうした取り組みを進めていくことが、社会的課題に向き合う公共空間としての役割であることを深く認識し、思い新たに「次なるステップへ」歩みを進めていくこととし、その大いなる回生への記念セミナーとして、生命科学の「知」の世界を拓いてこられた中村桂子さんの講演を企画開催することにしたのです。

「希望の“君の椅子”」を通して
中村桂子さんに出会う

中村桂子さんは、「人間は生きものであり、自然の一部」という事実を基本に、生命論的世界観を持つ知として「生命誌」を構想し、1993年「JT生命誌研究館」を創設しました。

私が中村桂子さんを知る契機となったのは、2006年から取り組んでいる「君の椅子プロジェクト」がつなぐ縁でした。

出会いは、2011年3月に発生した「東日本大震災」の際、震災当日に被災3県で誕生した98の「新しい生命」に、「生まれてくれてありがとう」の思いを込めて「希望の君の椅子」を贈呈したことに遡ります。98の「新しい生命」が産声を上げた時の状況や思いを綴った手記『3・11に生まれた君へ』(北海道新聞社など4社共同) を出版した際、毎日新聞紙上でその書評を書いてくださったのが中村桂子さんなのでした。

生命科学者である中村桂子さんは、かつて、経済界の指導的人物が、「小さな頃から経済社会の動きを学ばせることが必要だ」として、そのための「情報技術教育は、できるだけ早く、小学校低学年から行うべき」との論陣を張ったことに対し、日本経済新聞紙上で、「子どもたちは、“株”を勉強するより、大地に育つ“カブ”から学ぶことの方が大切」と反論しました。中村さんのその至言に共感・共鳴した当時の白井英男喜多方市長が、中村さんの思いの具体化として、小学校に「農業科」を組み入れることを決断、2006年に実現したのです。

12年前、美唄市教育長であった板東知文さん (前美唄市長) が、喜多方市のその先駆性に学び、『美唄市農業体験副読本』を制作したのは前述したとおりです。

そうした10数年前の経緯がある中で、私が「アルテピアッツァ美唄30年を機に、中村桂子さんを招くことにした」と板東さんに伝えると、板東さんは大変驚いた様子で、「磯田さんは、どうして中村桂子さんのような“ビッグ”を知っていたのですか？」と質問されました。私は、むしろその問いに驚き、「板東さんこそ、なぜ中村桂子さんを知って

いるのですか？」と逆質問したのです。そのやり取りが端緒となり、その時点では想像することもなかった「美唄市小学校“農業科”教育」の仕組みづくりがスタートすることになるのです。

HAL財団　中村桂子さんと美唄市を結ぶ役割を果たすことに…

中村桂子さんの助言を受け、喜多方市がスタートさせた「農業科」教育。その反響は大きく、全国各地から教育関係者などが多数視察に訪れたといいます。そして誰もがその取り組みの素晴らしさを称賛し「私たちも是非取り組みたい」と言いながら帰って行く状況だったそうです。

が、しかし、視察者の誰もが取り組みの意義を理解しつつも、喜多方市に続く自治体が一つもなかったことを、中村桂子さんは「とても残念なことだった」と述懐されています。

そうした状況にあった中、板東さんとの不思議な会話の展開によって、(1) 美唄市が喜多方市に学び、2011年『小学校農業体験副読本』を制作していたこと、(2) 制作後11年が経過し、現在、副読本の改訂版づくりが進められていること、を初めて私自身が知ることになりました。そうした事実と状況を中村桂子さんにお伝えしたのは、昨年(2022年)7月のことです。

その報告に中村さんは大変驚かれ、「喜多方市以外に副読本を作っていた自治体があることなど、この10年全く知らなかったし、想像もしていなかった。とてもうれしい知らせで、美唄市が進めている改訂版づくりに何らかの形でお手伝いさせていただければ…」との思いが寄せられました。高名な中村桂子さんからの申し出に、むしろこちらが恐縮し驚かされることになりました。

中村さんから申し出をいただいたことを機に、農業や農村文化などの在りように広く関わるHAL財団として、中村桂子さんと改訂版作業を進める美唄市、美唄市教育委員会との間を結ぶ役割を果たすことは「北海道農業に新しい春 (HAL) の息吹を…」というHAL財団の思いに叶うことであると考えました。その思いに沿う取り組みの一歩として、構造改革特区の認可を受けて小学校における「農業科」教育の扉を、日本で初めて開いた福島県喜多方市の「今」を把握することが大切であり、必要であると考え、喜多方市訪問を美唄市に呼び

かけました。そして、昨年（2022年）11月、津軽海峡を越え、遥かなる福島県喜多方市を訪ねることになったのです。

日本で唯一、小学校「農業科」を実践する喜多方市を訪問

2022年11月15日・16日の日程で喜多方市を訪問したのは、美唄市から市長、学務課長など4名、HAL財団からは田尻常務理事と私の、合わせて6名でした。喜多方市では、遠藤市長、大場教育長、中野学校教育課長補佐（指導主事）が対応してくださいました。

喜多方市教育委員会から説明のあった事柄は、概ね次のようなものです。

・2006年からスタートした喜多方市内小学校における「農業科」は、特区制度廃止後も総合学習の一環として継続している。

・福島県内も含め「農業科」の取り組みは広がっていないが、授業としての「農業科」教育の効果は、計り知れないほど大きなものがあると考えており、喜多方市としては、これからも継続していく方針は堅持していく。

・「農業科」は、市内17小学校で実施している。ほ場の確保などの課題はあるが、農業者の協力をもらいながら継続している。

・喜多方市の副読本は、制作から相当の時間が経過しているが、今のところ改訂版づくりは、予算上の制約もあり予定していない。

・今回、美唄市、HAL財団の訪問をいただき感謝している。今後、両市の子どもたちの交流などができると良いと思っている。

・HAL財団が進めている「大地の侍」の上映セミナーには（会津藩としても）大変興味がある。喜多方市でも上映の機会があると良い。

喜多方市の、以上のようなお話に対して、私から次のような事柄をお伝えしました。

・県内外への広がりはないとしても、農業科教育の意味、価値への深い思いをお聞かせいただき、うれしく心強く思う。

・喜多方市内外への情報発信や政策効果のアピールに苦労さ

れているとのことだが、こうして遠く北海道から美唄市長らが訪問したのは、喜多方市への深い敬意を込めてのこと。喜多方市の先駆性に対する美唄市長らの思いと来訪の意味を、喜多方市の情報発信の中で活用していただいて良いのではないか。

・美唄市も来年度からのスタートを目ざして、さまざまな手配を整えつつある。両市の「農業」への敬意を込めた先駆的な取り組みを、日本各地に広めていくために、両市の連携をお願いしたい。

・生命科学のレジェンドと言われる中村桂子さんは、喜多方市に“頼まれもしない”のに、喜多方市の先駆的取り組みを熱く語り、農業で学ぶ喜多方の子どもたちの「生きる力」に溢れた言葉や発言を紹介されている。喜多方市も、業務を担う皆さんが異動で交代し、近年中村桂子さんとの直接的接点はないかもしれないが、中村さんの次代を見据えた深い知見に学ぶことが大切だと感じる。改めて中村さんのお力をいただき、中村さんが語り続けている「知の世界」を、喜多方市の力として活かすべきではないかと思う。

美唄市とHAL財団が思いを共有することで実現した喜多方市訪問。これからの方向性を考える上で、とても貴重な学びの旅になりました。とりわけ、全国1800に及ぶ自治体の中の唯一“農業で学ぶ”ことに深い意味と価値を認め、これからも「農業科」教育を揺るぎなく進めていこうとしている喜多方市の方針を確認できたことはとても意義深いことでした。

美唄市、北海道で初めて「農業科」をカリキュラムに…

2022年11月15日・16日の日程で喜多方市を訪問し、喜多方市長や教育行政を担う方々と意見交換の時間を持ったことを中村桂子さんに報告しました。すると、次のような励ましの連絡をいただきました。

「素敵な報告をありがとうございます。みなさんが真剣に取り組んでいる様子が目に浮かびます。社会の動きは不安定で未来が危うく感じられる時がありますが、みなさんが、今、進めているような活動が子どもたちの生きる力を育て、未来につながるに違いないと思います。仲間に入れていただきますことを幸せに思っています。美唄の活動が本格化することを願いながら、改訂版のお手伝いをさせていただきます」(2022年11月)

中村桂子さんからの温かなお気持ちをいただき、具体的な形として、改訂版の冒頭に、子どもたちへのメッセージを掲載したいと考え、2023年2月、正式に原稿執筆をお願いしました。

その依頼に快く応えてくださり、2023年2月下旬、子どもたちに向けた優しく、そして深い「知」に裏打ちされたメッセージが届きました。

その言葉は、改訂版の冒頭に、「JT生命誌研究館名誉館長」からのお祝いメッセージとしてではなく、編集チームの一員である証しとして、改訂版編集委員会「特別アドバイザー」の立場で本文の第一章として掲載されることになりました。

前述したように美唄市は、2011年から「農業体験学習」を実施してきましたが、2022年8月の「アルテピアッツァ美唄」での講演会の折、意見交換の場で中村桂子さんから「体験学習はあくまで“体験”の域にとどまるが、週間の授業の“時間割”の中に“農業”として表示されてい

ることがポイント。そのことで子どもたちの心にしっかりと“農業”への思いが刻まれる」との貴重なアドバイスがありました。美唄市は、そのアドバイスに沿って、2023年から「時間割」の中に“農業”と表記することを決めました。そして、その表記も、最終的に「農業科」とすることになりました。

北海道の教育の歴史の中で、小学校の授業に「農業科」が位置付けられるのは初めてのことであり、全国的にみても、福島県喜多方市のみという画期的な取り組みと言えます。

改訂版自体の表記も、従来の延長であれば『美唄市小学校体験農業副読本』となるはずでしたが、これまで述べてきたような経過を辿り、「美唄市小学校“農業科”…」へと変わり、さらに「農業科」には“教科書”が存在しないことを踏まえ、「副読本」ではなく、「読本」とする決断に至りました。最終的に『美唄市小学校農業科読本』という、新しい世界が切り拓かれることになったのです。

中村桂子さんのメッセージを第一章に掲載した『農業科読本』がついに完成

編集委員会の皆さんの尽力と、関係者の願いが実り、2023年4月下旬、『美唄市小学校農業科読本』がついに完成しました。

その「読本」の最初のページに、第一章として美唄市小学校農業科読本編集委員会特別アドバイザーの立場で中村桂子さんが執筆した「あなたが生きものであることを学ぶ農業」と題するメッセージが掲載されました。優しさに充ちた言葉で、生きものの一つとしての私たち人間の在りようを綴り、「生きものはみんな仲間ということがわかってくると、たくさんの仲間と一緒に生きていくことが楽しくなってくるに違いない」と語りかけています。

そして、「農業科」で“農業で学ぶ”ことの意義を、中村桂子さんはメッセージの中で次のように語っています。「農業科は、自分で食べものを作って自立して生きていく力をつけると同時に、人間同士はもちろん、全ての生きものがつながった仲間であり、みんなで支え合いながら生きていくことが大事だということを学べる楽しい時間です…」

中村桂子さんが語られているように“農業で学ぶ”のは、生きものとしての仲間を大切にする心であり、さまざまな生きものに支えられて生きている“つながり”の心だとすれば、「農業科」という取り組みは、仲間としての生きものに感謝する心を「農業」を通して身に染み込ませていく場とも言っていいと思います。

そうした意味からも、美唄市、美唄市教育委員会が、「時間割」の中に「農業科」を組み込み“農業で学ぶ”場をスタートさせることは「農」の大地・北海道を未来から振り返ってみた時、その意味するものは深く、画期的なものであったと実感することになるに違いありません。

そうした思いを共有し「北海道農業に新しい春（HAL）の息吹を…」の願いを込め、2022年4月に思い新たに再スタートしたHAL財団は、美唄が進める「農業科」の伸展を支えるとともに、その輪を各地域に

つないでいく役割を果たしていきたいと考えています。

　そのための推進チームとして、HAL財団内に「“農業で学ぶ教育”の輪をつなぐサポートチーム」を設置することにしました。

　このサポートチーム設置には、中村桂子さんも賛成、共感してくださり、チームの一員（特別顧問）として参加していただくことになりました。うれしく、ありがたいことです。

美唄市長・教育長記者会見（2023年5月16日）、小学校「農業科」が正式にスタート

明治2年（1869年）に「開拓使」が設置されて以降、農地開拓や農業開発が営々と続けられ、今や農業を基幹産業とする北海道。しかし、154年此の方、今日に至るまで、どこからも、誰からも発意されることなく、実現されることのなかった小学校での「農業科」教育が、穀倉地帯の一角・美唄市で始まることになりました。農業王国を謳う北海道で「農業」の秘める“もう一つの価値”に新たな光が当たる取り組みがスタートしたのです。「農業“を”学ぶ」取り組みは、これまでもさまざまな場と形で行われてきましたが、その枠を超えて、生きものの一つという事実の上に立ち、「農業“で”学ぶ」ことを通して、この地球を持続可能な社会とするための遥かなる道のりに向けた、小さな自治体の大きな挑戦と言えるでしょう。未来から振り返ってみると「百年の計」に連なる確かな歩みの一歩だったと語り継がれていくに違いありません。

2023年5月16日、美唄市長が記者会見を行い、美唄の未来を切り拓く思いを込めて、北海道で初めての小学校における「農業科」授業のスタートと「農業科読本」の発行を正式発表しました。市長発言の概略を報告したいと思います。

美唄市は、農業の持つ力を次代を担う子どもたちに伝えていきたいとの思いで、2010年度から「小学校農業体験学習」をスタートさせ『農業体験学習副読本』も作成しました。それは、福島県喜多方市の先駆的な取り組みを知ったことが契機でした。喜多方市は、2007年から、小学校で「農業科」授業をスタートさせました。喜多方市が日本初の「農業科」に取り組んだのは、生命科学の第一人者として「生命誌」の世界を構想した中村桂子さんが「人間は生きものであり自然の一部」という事実をもとに「子どもたちが、生きることの本質を学ぶ機会として“小学校で農業を必須に…”」と提唱したことを受け、その熱い思いに共感した、当時の白井喜多方市長が「農業科」を小学校

教育に組み込んだのです。

その中村桂子さんが、昨年(2022年)8月、美唄市内の「アルテピアッツァ美唄」で講演される機会があり、その折、前述したように、中村さんから「農業の体験学習は今や一般的だが、あくまで体験の域にとどまる。学校の時間割の中に、国語、算数、理科、社会と同じように“農業”と明記されていることが大切で、そのことで、子どもたちの心に“農業”への思いが深く刻まれていく」という貴重なアドバイスをいただきました。

中村さんの次代を見据えた的確なアドバイスを踏まえ、美唄市としては、今年度から小学校の授業時間割の中に「農業科」を組み込み、継続的に「農業で学ぶ」取り組みを進めていくことにしました。また改訂版づくりを進めていた「副読本」についても、“副”を取り、『農業科“読本”』として発行し、「農業科」授業を進めていく手立てとしての役割をより明確にしました。

今回発行した『農業科読本』の第一章に、美唄の子どもたちに向けて「あなたが生きものであることを学ぶ農業」と題した中村桂子さんのメッセージを掲載することができました。今を生きる全ての人たちの心にも届けられるべき、深いスピリットに満ちていると感じます。

この読本に基づく「農業科」授業を通して、子どもたちの心に、この地球に生きる上での謙虚さ、同じ生きものである仲間たちに向けた優しい眼差し。さらに、その学びを通して美唄の子どもたちの胸に、この美唄、そして北海道に育ち暮らした「誇り」がゆっくり湧き上がってくることを信じたいと思います。

美唄市でスタートした「農業体験学習」「副読本」が、13年の歳月を経て「農業科」そして「農業科読本」へと進化し、全国でも類い稀な先駆的取り組みとして新たなスタートを切ることになったことは、美唄市の未来に向けた地域づくりにとって、大きな意味と価値を持つと考えます。

「農業科」の推進に先駆的に取り組み、大きな成果を上げている福

島県喜多方市とも連携の輪を広げ「農業の時代」と言われている今日、農業の持つ根源的価値を深めていく役割を果たしていきたいと思います。

記者発表の締めに、農業科読本編集委員会の特別アドバイザーである「“農業で学ぶ教育”の輪をつなぐサポートチーム」の磯田代表（一般財団法人HAL財団理事長・認定NPO法人アルテピアッツァびばい理事長）に参加いただいている経緯に少し触れさせていただきます。「アルテピアッツァ美唄」には、3年前まで市立栄幼稚園が開園されていましたが、残念ながら65年の歴史に幕を下ろし閉園しました。その後、市は、閉園後の「利活用検討委員会」を設置し、磯田代表にも参加いただき、2年に及ぶ議論を経て、2022年3月「幼児教育機能を多様な形で取り戻し、子どもの生命という普遍的価値を育む空間としての役割を果たすべき」という確信に満ちた提言が出されました。美唄市民の誇りを育む確かな道に向かう新しい未来像が提起されたのです。そうした方向に向けて、管理運営を担うNPO法人「アルテピアッツァびばい」が中心となり、「アルテピアッツァ美唄30年、次なるステップへ」事業が企画され、中村桂子さんをお招きしての記念講演会が開催された訳です。今後「“農業で学ぶ教育”の輪をつなぐサポートチーム」の代表として、美唄市とも連携し、授業としての「農業科」を推進するという「美唄モデル」を各地域に広めていく活動に取り組んでくださることになっています。

農業王国・北海道に、「農業科」の輪が広がっていくことを心から願っています。

“農業で学ぶ教育”の輪をつなぐサポートチームを結成、「農業科」を北海道スタンダードに

2023年5月16日、美唄市役所で開かれた記者発表の場で、美唄市長、そして教育長から正式に小学校における「農業科」授業のスタートが正式発表されました。従来発想を乗り越え、新しい取り組みの扉を開けることは、どのような分野であっても、勇気とエネルギーのいることですが、美唄市、そして美唄市教育委員会は、子どもたちの「生きる力」は勿論、多様な生命に対する敬愛の思いを育むことの大切さを深く認識し、北海道では初めて、全国でも二例目という先駆的取り組みをスタートさせることになりました。

中村桂子さんの「農業科」教育への深い思いと、美唄市、美唄市教育委員会の挑戦を繋ぐ役割をささやかながら果たしてきたHAL財団の立場で、市長の記者発表に同席し「農業科」教育の推進をサポートしていく思いを、次のように申し述べさせていただきました。

美唄市内の小学校のカリキュラムに「農業科」を組み入れるという決断は、まさに北海道農業に新しい季節、新しい春を呼ぶチャレンジと言えるものです。

福島県喜多方市長の時代感覚の鋭さ、そしてその喜多方市長に一歩を踏み出させた中村桂子さんの、時代を透徹した感性、それらがなければ、日本における小学校の「農業科」教育の旅立ちはありませんでした。

中村桂子さんは、SDGsなどという流行語が生まれる遥か前から、生きものとしての人間の「在りよう」を語り続けてきた方です。中村桂子さんが語り継いできた感性と言葉に、時代がやっと追いついてきたのです。中村さんは、「生態系のトップにいるような錯覚から生まれる“上から目線”ではなく、生きものとしての“中から目線”が大切」と語り続けてこられました。その中村さんとの不思議なご縁や、喜多方市の優れた取り組みとの出会いが、13年の歳月を超えて、この北の大地・北海道に「知恵のバトン」が辿り着きました。

明治2年（1869年）に北海道開拓使が置かれ、本格的な農地開拓が始まって154年。今や北海道は食糧基地の役割を果たすまでになりましたが「北海道は農業が基幹産業」と標榜しながら、人間教育のスタートとも言うべき小学校教育に「農業」の持つ力を学ぶ「農業科」を組み込む発想は、これまで農業や教育を担う機関からは勿論、農業界からも出てくることはありませんでした。

しかし、昨年夏、中村さんから的確で普遍的なアドバイスをいただき、北海道で初めての「農業科」教育が、この美唄から始まることになりました。

中村桂子さんは「農業科は、子どもたちの“生きる力”を引き出す。日本中の小学校に農業科ができたら、日本はすばらしい国になるでしょう」と語り続けてこられました。そして多くの方も、これからは「農業の時代」だと指摘しています。しかし、それは、生きる上で食糧確保が何より大事、という意味だけでなく、地球環境が困難な時代を迎えている今、生きものとしての人間が、生きる仲間たちの生命をいただくことで支えられていることを深く認識し、生きものとして踏まえるべきものを学ぶという意味も含めた「農業の時代」でありたいと思います。

美唄市が「農業科」教育をスタートさせたからといって、そうした時代が直ちに実現するような容易い道のりではありません。しかし、千里の道も一歩からです。美唄市のチャレンジが確かな道のりへの第一歩となり、いつの日か、北海道全体の「スタンダード」になることを心から願っています。

その思いを込めて、HAL財団の中に、今日を期して、「“農業で学ぶ教育”の輪をつなぐサポートチーム」を設置いたしました。このチームの活動を通じて、美唄市、美唄市教育委員会が進める小学校における「農業科」教育という「美唄モデル」の輪を、北海道だけでなく

日本各地に広げていく活動に取り組んでいきたいと思います。このチームには、中村桂子さんも、心からの喜びを持って参加してくださいました。共に手を携えて「農業“で”学ぶ」輪を広げて参ります。
　ご理解とお力添えをどうぞよろしくお願いいたします。

「“農業で学ぶ教育”の輪をつなぐサポートチーム」

特別顧問　中村桂子（JT生命誌研究館名誉館長）
代　　表　磯田憲一（一般財団法人HAL財団理事長）
田尻忠三（一般財団法人HAL財団常務理事）
村上孝徳（美唄市教育委員会教育部長）
羽深久夫（美唄市教育委員会特別アドバイザー）
（メンバーは、状況に応じ、随時必要な方に参加いただきます）
（注：肩書は当時のもの）

著者略歴

磯　田　憲　一（いそだ　けんいち）

1945年旭川市生まれ。1967年に明治大学法学部卒業後、北海道庁入庁。

以後、一貫して北海道人の視点で地域の振興に取り組む。北海道政策室長、上川支庁長、総合企画部長を経て副知事となり、2003年に退任。在職中は、北海道文化振興条例制定や、行政の無謬性神話を打破する契機となった「時のアセスメント」の発案、BSE（狂牛病）問題対策本部長として日本の標準となった全頭検査と一次検査公表などを手がける。2006年から、誕生した子どもに椅子を贈るプロジェクト「君の椅子」に取り組む。2014年に第6回日本マーケティング大賞地域賞、2015年9月、第37回サントリー地域文化賞をそれぞれ受賞。2022年に第73回北海道文化賞受賞。

編著書に　「遥かなる希望の島～『試される大地』へのラブレター」（出版社：亜璃西社）、「3・11に生まれた君へ」（出版社：北海道新聞社）。

現在

・（公財）北海道文化財団 理事長
・（一財）ＨＡＬ財団（旧 農業企業化研究所）理事長
・学校法人北工学園 理事長
・旭川市立大学大学院客員教授
・安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄 館長
・君の椅子プロジェクト 代表

HAL

HAL FOUNDATION

Hokkaido Agricultural Laboratory